

# TALK & TALK

トーク&トーク

永六輔さん

昭和六十三年三月、永六輔さんは山鹿市出身の女優上月晃さんの呼び掛けて来熊。棧敷も天井も穴だらけという八千代座で、この芝居小屋が全国的に見ても非常に重要な文化遺産であることを力説されました。永さんの言葉に触発され、山鹿青年会議所を中心に、八千代座復興に向けての活動が巻き起こりました。その活動が実を結び、同年十二月十九日に八千代座は国の重要文化財の指定を受けることになったのです。

今回、再び山鹿にいらつしゃった永さんにお話を伺いました。

# 永六輔

僕で手伝えることがあるならと

一年三百三十日

日本中を旅しています。

熊本へは何度もおいでになつてはいるんですが、もう何回ぐらいだろうな...、百回は軽く超えますね。ただ、僕は毎日が旅暮らしだから、どこでも通過地点なんです。今日も高崎（大分県）から来たんです。明日は沖繩へ行くでしょ。あさつては石垣、その次は仙台...、そうやってほしい動いてます。

日本中を旅していらつしゃるんですね。

一年のうち三百三十日は東京にいませんね。何か運動をして手伝いが欲しいなつて人は日本中にいるわけですよ。で、僕なんかでも手伝えることを持っている、そうするとそこへ手伝に行つてますね。

学生時代、先生にこう言われたことがあるんです。僕は学生の時からラジオの仕事をしていましたのでね、「君は電波の仕事をしている限り、電波が流れている先へ行つて、そこでどう受け止められているかを見届け、それからスタジオに戻つてきて話をしなさい。スタジオにいて、スタジオで考えて、スタジオでものを言つてはだめだ」つて。それで僕はその通りになるんです。自分の流した電波の結果つていうもの責任を持たなきゃね。僕のラジオの電波が届いている所ならどこへでも行く努力をしています。

八千代座には、どんな魅力を感じていらつしゃいますか。

まず、八千代座には花道が上下両方にあるんです。役者が客席ごしにやりとりができるという面白さ。

う面白い芝居小屋なんですよ、ここは。

八千代座に限らず、古い芝居小屋つていうのはね、建築家がつつたんじゃないんですよ。みんな大工さんがつたんですよ。だから柱だつてたくさんあつて邪魔だつて言つちゃえば邪魔でしょ。それが邪魔にならない所がいいんですよ。舞台から見るとよくわかるんだけど、放射状に並んでますから。これはね、昔の人の知恵なんですよ。

お客さんの数だつて上手に加減できるんですよ。棧敷には一柵にだいたい四人入れるんだけど、入りのいい舞台の時は八人入れちゃったりします。そういうことは椅子席じゃできないでしょう。一柵に一人だつたら寝ながら観たつていいんですよ。座布団一枚に一人つて勘定じゃない、そんな所が素敵なんですよ。

今後、八千代座にどうつてことを期待されますか。

文化財だからつてしまひ込まれるよりも、もっと活性化してみんなに親しまれる芝居小屋になるといいですね。

例えば夏場、誰か和服の人が舞台上立つ時に浴衣でなきゃ入場できないことにするとかね。絵になりますからテレビ局だつて来ますよ。舞台も客席も全員着物つてことは今ありえないでしょう。「八千代座は何かおもしろいことをやってるぞ」と思わせる、その積み重ねが大切なんです。山鹿の人の心意気をみせるんですよ。

八千代座の座は、あなたが歌舞伎座の座というだけじゃないんですよ。もともと、丸くなつて何かをすることが座なんです。だから、まず山鹿の町が座であつて欲しいと思います。建物としての八千代座は、そのシンボルとしてみんなに愛されていくといいですね。



## 永六輔さん(放送タレント)

1933年、東京浅草の寺に生まれる。中学の時、NHKラジオ「日曜娯楽版」に投書をして以来、ラジオを中心に作詞、テレビ、出版の仕事が続いている。生活の大部分は旅暮らしで、そこで感じた矛盾や感動を語り、書き、時には市民運動やボランティア活動を手伝っている。

